

# 美杉村における高齢者の 生活実態と意識に関する調査

伊藤きよ子・冨田輝司

A Study of Aging Population And  
Their Attitudes Toward Social Realities  
in Misugi Village (An Aging Community)

Kiyoko ITOH and Terushi TOMITA

## I 緒 言

日本の人口高齢化は、近年急速に進み、昭和60年に10.3%（総務庁統計局の「高齢者の推計人口」による）の老年人口比率は、30年後の昭和90年ごろには21%台（1984年に人口問題審議会がまとめた「日本人口の動向」による）に達するといわれている。

それにともない、老人福祉に関する諸問題、とりわけ、独居老人の問題、老人介護の問題などが深刻な問題としてとりざたされている。

このような背景を踏まえ、筆者らは行政機関、教育機関における老人福祉問題検討のための基礎資料を得ることを目的とし、特に高齢化の進行している三重県美杉村にて、高齢者の生活実態ならびに意識に関する調査を実施した。

美杉村は、三重県の中中部、一志郡の西南方に位置し、林業と農業を基幹産業とする林野率87.3%の、過疎化の進んでいる山村である。

7ヶ村の合併により美杉村が新発足した昭和30年には17,212名であった人口は、30年後の昭和60年には9,630名と、44.1%もの減少がみられ、昭和45年に国から過疎地域の指定を受けている。特に流出による若年層の人口の減少は著しく、それによって人口高齢化は約22%と、全国平均をはるかに上廻る現状にある<sup>1)</sup>。

本研究は、美杉村でも特に高齢化、過疎化の進行している八幡地区を対象地域とし調査した結果の一部を報告する。

## Ⅱ 調査方法

### 1. 調査対象

三重県一志郡美杉村八幡地区に居住する65才以上の男子80名，女子122名，計202名を対象とした。被調査者の年齢は表1に示した。

表1 年 齢

	男		女		不	明	計	
65～69才	18	22.5	17	14.0			35	17.3
70～74才	20	25.0	43	35.5			63	31.2
75～79才	24	30.0	30	24.8			54	26.7
80～84才	6	7.5	24	19.8	1		31	15.4
85～89才	11	13.8	7	5.8			18	8.9
90才以上	1	1.3					1	0.5
計	80	39.6	121	59.9	1	0.5	202	100.0

なお表はすべて破線の左側に人数を，右側に比率（％）を示した。

### 2. 調査方法

質問紙による訪問面接調査を実施した。

調査員は，被調査者から回答を得られやすいとの判断から，八幡老人クラブの役員に依頼した。調査員には，本調査の主旨と実施方法を書面により説明した。

### 3. 調査時期

昭和61年7月初旬～中旬

### 4. 回収状況

回収数 202 票，回収率 100 %

### 5. 調査項目

主な調査項目は，年齢・家族構成などの基礎的項目，健康状態，世話・介護体制，日常生活動作の能力，就労状況，日常生活における時間配分，生活満足度，自己存在感などである。

## Ⅲ 結果と考察

### 1. 家族構成

表2に示すように、男子は「夫婦のみ」「息子の家族と」の比率が、それぞれ47.5%、43.8%で多かった。これに対し女子は、「息子と家族と」は55.4%であったが、「夫婦のみ」は18.2%と、男子の約0.38倍であった。逆に「一人暮らしは」19.8%と男子の約4倍となり、女子は5人に1人の割合で「一人暮らし」をしていることがわかった。

表2 家族構成

	男		女		不 明	計	
	人数	比率	人数	比率		人数	比率
一人暮らし	4	5.0	24	19.8		28	13.8
夫婦のみ	38	47.5	22	18.2		60	29.7
息子の家族と	35	43.8	67	55.4	1	103	51.0
娘の家族と			2	1.7		2	1.0
独身の子のみと	2	2.5	5	4.1		7	3.5
孫のみと						0	0.0
子・孫以外の親族のみと			1	0.8		1	0.5
他人のみと						0	0.0
その他	1	1.3				1	0.5

## 2. 子どもとの関係

男女共、97.5%のものは生存している子どもがおり、平均子ども数は2.96人であった。このうち、子どもと別居しているものは、男子51.3%、女子38.1%と男子の別居率の方が高くなっている。

子どもとの別居の理由は、78.8%が「子どもの仕事の関係」であった。この比率の高さは、山村としての地形が農業経営に制限を加え、農業だけでは生活できなくなった人々が労働力需要に応じて都市部へ流出した<sup>1)</sup>結果であろう。その他の理由としては、「住んでいる所を離れたくないの」が20.0%であった。

次に別居している子どもとの交通機関を利用した場合の時間的距離を表3に示した。

表3 別居の子どもとの時間的距離

	男		女		計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率
5分以内	3	7.5	2	4.4	5	5.9
10分以内	2	5.0	4	8.9	6	7.1
10～30分以内	3	7.5	8	17.8	11	12.9
30分～1時間以内	3	7.5	3	6.7	6	7.1
1～2時間以内	10	25.0	12	26.7	22	25.9
2時間以上だが日帰りできる	18	45.0	15	33.3	33	38.8
遠方で日帰りできない	1	2.5	1	2.2	2	2.3

「2時間以上だが日帰りできる」が男子45.0%、女子33.3%で最も多く、次いで「1～2時間以内」が男子25.0%、女子26.7%であった。「遠方で日帰りできない」は2.3%であった。

表4 別居している子どもとの交流状況

	男		女		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
毎日のように					0	0.0
週に1～2回ぐらい	6	15.0	7	15.6	13	15.3
月に1～2回ぐらい	14	35.0	17	37.8	31	36.5
年に数回ぐらい	17	42.5	20	44.4	37	43.5
この1年間行き来していない	1	2.5			1	1.2
未記入	2	5.0	1	2.2	3	3.5

表4は別居している子どもとの交流状況を示したものである。「年に数回ぐらい」が43.5%で最も多く、次いで「月に1～2回ぐらい」が36.5%であった。

### 3. 世話・介護体制

日頃の世話をしてくれる同居人がいるかを調査した結果、男子は93.8%、女子は76.0%が「いる」と答えており、男子の方に世話人のいる比率が高かった。これは、一人暮らしの比率の違い（男子5.0%、女子19.8%）が影響したものと思われる。

表5 同居の世話人続柄

	男		女		不明	計	
	人数	割合	人数	割合		人数	割合
配偶者	60	80.0	22	23.9		82	48.8
嫁	13	17.3	52	56.5	1	66	39.3
息子			3	3.3		3	1.8
娘	2	2.7	14	15.2		16	9.5
男の孫						0	0.0
女の孫						0	0.0
その他の親族			1	1.1		1	0.6

世話をしてくれる同居人との続柄は表5に示すように、男子の80.0%が「配偶者」であるのに対し、女子は「嫁」が56.5%で最も多く、「配偶者」は23.9%であった。

次に万一寝込んだ場合、身の世話をしてくれる予定者の有無をみたところ、全員が「いる」と答えた。その続柄は表6に示した。

表6 寝込んだ場合の身辺世話予定者との続柄

	男		女		不明	計	
	人数	割合	人数	割合		人数	割合
配偶者	44	55.0	12	9.9		56	27.7
娘	8	10.0	27	22.3		35	17.3
息子	1	1.3	9	7.4		10	5.0
嫁	26	32.5	71	58.7	1	98	48.5
親戚の人	1	1.3	2	1.7		3	1.5

最も多い続柄は、男子は「配偶者」で55.0%、女子は「嫁」が58.7%であった。これを先の同居の世話人続柄と比較すると、男女とも「配偶者」が減少し、男子では「嫁」と「娘」女子では「娘」の比率が増加していることがわかる。寝込んだ場合の介護は、肉体的にも負担が大きいこと、配偶者も介護される立場になりやすいことなどが、「配偶者」の比率を減少させた理由として考えられる。また世話人としての男性（配偶者、息子）の比率の低いことは、「世話は女性がするもの」という役割意識によるものであろう。

表7 寝込んだ場合の身近世話予定者との時間的距離

	男		女		不明		計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
同居または同じ敷地内に住んでいる	72	90.0	84	69.4	1		157	77.7
5分以内	3	3.8	3	2.5			6	3.0
10分以内			2	1.7			2	1.0
10～30分以内	1	1.3	6	5.0			7	3.5
30分～1時間以内	2	2.5	2	1.7			4	2.0
1～2時間以内	2	2.5	9	7.4			11	5.4
2時間以上だが日帰りできる			15	12.4			15	7.4

身近世話予定者との時間的距離は表7に示すように、「同居または同じ敷地内に住んでいる」が男子90.0%、女子69.4%と多いが、女子の場合、実際には世話を受けることが非常に困難な状況にあると考えられる「2時間以上だが日帰りできる」が12.4%あった。

#### 4. 健康状態と日常生活動作能力

健康状態を表8によりみると、「床から離れている時間の方が多いが、あまり動かない」「寝たり、起きたり」「ほとんど寝たきり、まったく寝たきり」といった健康状態の悪いものは、計4.0%であり、女子は少い。

表8 健康状態

	男		女		不明		計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
バス、電車を使って時には外出する あるいはそれ以上活発である	51	63.8	57	47.1			108	53.5
家庭内ではほぼ不自由なく活動する 隣近所には一人で出かける	19	23.8	53	43.8	1		73	36.1
家庭内ではある程度動くが、殆ど 隣近所には出ない	4	5.0	9	7.4			13	6.4
床から離れている時間の方が多いが、 あまり動かない	2	2.5	1	0.8			3	1.5
寝たり、起きたり	1	1.3					1	0.5
ほとんど寝たきり、まったく寝たきり	3	3.8	1	0.8			4	2.0

次に日常生活動作能力として歩行能力、視力、食事能力、着脱衣、排泄、入浴の6項目をと

りあげ、その結果を表9～表14に示した。

表9 歩行能力

	男		女		不明	計	
外出も自由にできる	58	72.5	79	65.3	1	138	68.3
家のまわりは自由に歩ける	17	21.3	38	31.4		55	27.2
物につかまれば歩ける	3	3.8	3	2.5		6	3.0
はって歩く						0	0.0
歩行不能	2	2.5	1	0.8		3	1.5

歩行能力は「歩行不能」のものが3名いた。

表10 視力

	男		女		不明	計	
普通	62	77.5	93	76.9	1	156	77.2
細かい字はほとんど見えない	15	18.8	27	22.3		42	20.8
1メートル離れると顔がわからない	2	2.5	1	0.8		3	1.5
ほとんど見えない	1	1.3				1	0.5

視力（眼鏡使用可）は、「普通」と答えたものが男女とも約77%、「1メートル離れると顔がわからない」「ほとんど見えない」といった日常生活に著しく支障をきたすと思われる状況のものは全体の2%であった。

表11 食事能力

	男		女		不明	計	
特別の配慮はいらない	76	95.0	119	98.3	1	196	97.0
どうにか箸は使えるが、魚をほぐすなど細かいことはできない	2	2.5	1	0.8		3	1.5
箸は使えないが、スプーンや、フォークで自分で食べられる	2	2.5				2	1.0
自分では食べられない			1	0.8		1	0.5

食事能力は「自分では食べられない」が女子に1名いたが、残りのものは支障はないといえよう。

表12 着脱衣

	男		女		不明	計	
自分でできる	73	91.3	114	94.2	1	188	93.1
時間がかかるが自分でできる	4	5.0	6	5.0		10	4.9
一部介助が必要	1	1.3				1	0.5
全面介助が必要	2	2.5	1	0.8		3	1.5

着脱衣は介助を必要とするものは4名であった。

表13 排 泄

	男		女		不 明		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
もらすことはない	76	95.0	117	96.7	1		194	96.0
気がついてはいるが、ときどき間に合わなくてももらすことがある	4	5.0					4	2.0
ときどき気がつかないで、もらすことがある			3	2.5			3	1.5
全面失禁			1	0.8			1	0.5

排泄は「全面失禁」と答えたものは1名のみであり、「もらすことがある」を加えても8名であった。

表14 入 浴

	男		女		不 明		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
自分で入れる	74	92.5	116	95.9	1		191	94.5
一部介助が必要	3	3.8	4	3.3			7	3.5
全面介助が必要	3	3.8					3	1.5
介助しても入れない			1	0.8			1	0.5

入浴は「一部介助が必要」「全面介助が必要」のものが合計10名おり、「介助しても入れない」ものも1名いた。

## 5. 就労状況

表15は就労の有無を性別、年齢別に示したものである。就労「しているもの」は男子に多く、特に65～69才の男子は88.9%が就労している。

表15 就 労 の 有 無

年 齢	男				女				不 明	
	している		していない		している		していない		している	していない
65～69才	16	88.9	2	11.1	9	52.9	8	47.1		
70～74才	9	45.0	11	55.0	19	44.2	24	55.8		
75～79才	13	54.2	11	45.8	5	16.7	25	83.3		
80～84才			6	100.0	2	8.3	22	91.7		1
85～89才			11	100.0			7	100.0		
90才以上			1	100.0						

就労率は男女とも加齢につれて減少する傾向にあり、80才を就労の境とみることができるが、女子では80才以上で就労「している」ものが2名おり、その職業は農林業であった。

就労しているものの職種は、表16に示すように豊林業が多く、次いで「日雇い、臨時、パート」であった。

表16 職業の種別

	男		女		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
農 林 業	12	31.6	21	60.0	33	45.2
自 営 業 (商・工)	8	21.0	3	8.6	11	15.1
常 雇 勤 労 者 (事 務)	3	7.9			3	4.1
常 雇 勤 労 者 (技 術・技 能)					0	0.0
常 雇 勤 労 者 (労 務)	4	10.5			4	5.5
日 雇 い・臨 時・パ ー ト	9	23.7	8	22.8	17	23.3
内 職	2	5.3	3	8.6	5	6.8

就労の目的は表17に示した。男子は「生計維持のため」が65.8%と多く、女子は「何もしないと退屈だから」が54.3%、次いで「生計維持のため」31.4%であった。「生計維持のため」は男女を合計すると49.3%となり、人口約41万人(昭和60年)の商業都市である倉敷市が昭和56年に実施した高齢者実態調査<sup>2)</sup>(以下、倉敷市調査とする)結果の33.1%の1.5倍にのぼる。

表17 就 労 目 的

	男		女		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
生 計 維 持 の た め	25	65.8	11	31.4	36	49.3
小 遣 い を 得 る た め	5	13.2	2	5.7	7	9.6
仕 事 に 生 き が い を 感 じ て い る た め	1	2.6	1	2.9	2	2.7
何 も し な い と 退 屈 だ か ら	6	15.8	19	54.3	25	34.3
健 康 の た め					0	0.0
未 記 入	1	2.6	2	5.7	3	4.1

本調査は倉敷市調査に比し、家族構成の「夫婦のみ」の比率が高く、この事が「生計維持のため」就労しなければならない原因の1つとなり、比率が高くなったのではないかと考えられる。

## 6. 収入源

先に「生計維持のため」就労しているものの多いことを指摘したが、次に、何を収入源としているかをみた。

表18は収入源のうち金額の多いものから順に3位まであげてもらった結果である。

第1, 第2収入源とも「年金・恩給」と答えたものが最も多く、「年金・恩給」の収入に占める比率の高さがわかる。

第1収入源で「年金・恩給」以外の主なものをあげると、男子は「勤労収入」26.3%、女子は「仕送り」15.7%である。

第2収入源を「なし」としたものは、男子37.5%、女子57.9%であり、第3収入源に至っては、男女とも95%以上のものが「なし」としている。





## 8. 生活満足度

生活満足度は「大変満足」「まあ満足」「普通」「やや不満」「大変不満」の5つの選択肢により調査した。その結果、「大変満足」しているものはいないが、「不満」であるとするものもなく、「まあ満足」「普通」が各50.0%であった。

## 9. 心配事

心配事の「ある」ものは男子が43.8%と高く、女子は29.8%であった。

表20 心配事の内容

	男		女		計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
体のこと	26	74.3	25	69.4	51	71.8
仕事のこと					0	0.0
住まいのこと					0	0.0
経済的なこと					0	0.0
子どもや孫のこと	5	14.3	7	19.4	12	16.9
頼る人のいないこと	1	2.9	2	5.6	3	4.2
配偶者の病気	2	5.7	2	5.6	4	5.7
未記入	1	2.9			1	1.4

心配事の内容は表20に示したが、自分自身の「体のこと」が男子74.3%、女子69.4%と高く、次いで「子どもや孫のこと」であった。

## 10. 自己存在感

被調査者の自我像の一端をつかむために、自己存在感について調査した。

自己存在感(1)「あなたに対し、家族や身内の人は色々配慮したり、気をつけたりしてくれていると思いますか」に対しては、男子の97.5%、女子は100.0%が「思う」と答えている。

自己存在感(2)「あなたは社会のお役に立っていると思いますか」については、「思う」が少く、特に女子は5.8%と少かった。

自己存在感(3)「あなたが言う事に、まわりの人は耳を傾けてくれていると思いますか」については、「どちらともいえない」が男子75.0%、女子95.9%と多かった。「耳を傾けてくれる」は男子23.8%に対し、女子は4.1%と少く、自己存在感(2)の結果も考えあわせると、女子は自己存在感測定項目に対して否定的な傾向にあるといえる。

自己存在感の(2)と(3)の結果を倉敷市調査<sup>2)</sup>と比較すると、倉敷市調査では肯定的な回答をしたものがそれぞれ40.3%、75.9%であり、本調査とは著しく異なった結果を示している。

倉敷市調査は、社会の役に立っているを意識するかしないかは「日ごろ1番時間をとっていること」が最も大きく影響していると報告しているが、本調査ではそのような傾向は認められず、影響を与える要因の特定はできなかった。

## Ⅳ ま と め

美杉村における高齢者の生活実態と意識について調査した結果を要約すると次のようである。

1. 家族構成は「息子の家族と」が、男子43.8%、女子55.4%、「夫婦のみ」が、男子47.5%、女子18.2%であった。また「一人暮らし」の女子は19.8%と男子の約4倍であり、女子の5人に1人は「一人暮らし」であった。

2. 子どもの生存しているものは97.5%であったが、このうち、別居しているものは男子51.3%、女子38.1%であった。その理由としては「子どもの仕事の関係」が78.8%と高い比率を占めた。

別居している子どもとの交流状況は、「年に数回ぐらい」が43.5%で最も多かった。

3. 日ごろの世話をしてくれる同居人のいるものは男子93.8%、女子76.0%であった。その続柄は、男子の場合「配偶者」が80.0%を占めたが、女子は「嫁」が56.5%、「配偶者」は23.9%であった。

万一寝込んだ場合の世話予定者については、男子の55.0%が「配偶者」と答え、女子は58.7%が「嫁」であった。世話予定者との時間的距離をみると、「2時間以上だが日帰りできる」距離のものが女子に12.4%あった。しかしこの距離では、実際には世話を受けることが非常に困難であると思われる。

4. 健康状態は「寝たきり」や「あまり動かない」など状態の悪い者は4.0%で、女子は少なかった。

6種の日常生活動作のそれぞれについて、不自由なものは1~11名であった。

5. 就労状況は、65~69才の男子は88.9%が就労していた。就労率は男女とも加齢につれて減少する傾向にあり、80才を就労の境とみることができる。

就労の目的は、「生計維持のため」が男子65.8%、女子31.4%であり、その他には「何もしないと退屈だから」が女子に多く、54.3%であった。

6. 収入源は「年金・恩給」の占める比率が高かった。

7. 日ごろ1番時間をとっていることの多いものは、「仕事」が男子46.3%、女子27.3%、「テレビなどの娯楽」が男子31.3%、女子40.5%であった。2番目に時間をとっていることは男女とも「テレビなどの娯楽」が多く、それぞれ40.0%、43.0%であった。

8. 生活満足度については「まあ満足」「普通」がそれぞれ50.0%であった。

9. 心配事の「ある」ものは、男子43.8%、女子29.8%で、自分自身の「体のこと」を心配しているものが男子74.3%、女子69.4%と多かった。

10. 自己存在感に関する質問に対しては、家族や身内の人は色々配慮したり、気をつけてく

れていると「思う」ものは男子97.5%、女子100.0%で、ほとんどのものが肯定的であったが、まわりの人は耳を傾けてくれていると思うかに対しては「どちらともいえない」が男子75.0%、女子95.9%であり、社会の役に立っていると思うかについては、「思わない」が男子58.8%、女子82.6%と否定的意見が多かった。

今回の調査対象者のほとんどは、ほぼ健康な状態にあり、生活に対する不満もないようである。しかし夫婦のみ、あるいは一人暮らしの世帯が多く、子どもとの交流も年に数回のケースが多いことなどから、将来深刻な問題の続出する可能性は充分あるといえよう。

また、息子あるいは娘と同居しているものでも、寝込んだ場合の介護による家族の負担問題は、避けて通ることのできない問題であり、問題解決のための早急な検討と実行が望まれる。

本調査にご協力いただきました美杉村役場ならびに八幡地区老人クラブの皆様に深謝申し上げます。

#### 参 考 文 献

- 1) 三重県美杉村：美杉村総合計画 昭和56年
- 2) 倉敷市：高齢者実態調査結果報告書 昭和57年